

グレート・ ギャツビー



フィツジェラルド
野崎 孝 訳

新潮文庫



Title: THE GREAT GATSBY
Author: Francis Scott Fitzgerald

グレート・ギャツビー

新潮文庫

フ - 9 - 1



昭和四十九年六月三十日 発行
平成元年五月二十日 四十刷改版
平成三年八月五日 四十五刷

訳者 野崎 孝^{たかし}

発行者 佐藤 亮 一

発行所 株式会社 新潮 社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)三二六六レ五一
編集部(〇三)三二六六―五四四〇
振替 東京四一八〇八番
価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・錦明印刷株式会社 製本・錦明印刷株式会社

© Takashi Nozaki 1974 Printed in Japan

ISBN4-10-206301-3 C0197

新 潮 文 庫

グレート・ギャツビー

フィッツジェラルド
野 崎 孝 訳



新 潮 社 版

2175

グレート・ギャツビー

さあ 金色帽子きんいろぼうしを被かぶるんだ それであの娘むすめがなびくなら
あの娘のために跳んでみろ みごとに高く跳べるなら
きつとあの娘は叫ぶだろ 「金の帽子すてき 高跳びもいかすわ
恋人よ あんたはあたしのもの！」

——トマス・パーク・ダンヴァリエ

ふたたび

ゼルダに

第一章

ぼくがまだ年若く、いまよりもっと傷つきやすい心を持っていた時分に、父がある忠告を与えてくれたけれど、爾来ぼくは、その忠告を、心の中でくりかえし反芻してきた。

「ひとを批判したいような気持ちが起きた場合にはだな」と、父は言うのである「この世の中の人々がみんなおまえと同じように恵まれているわけではないということを、ちよつと思いだしてみるのだ」

父はこれ以上多くを語らなかつた。しかし、父とぼくとは、多くを語らずして人なみ以上に意を通じ合うのが常だったから、この父のことばにもいろいろ言外の意味がこめられていることがぼくにはわかつていた。このためぼくは、物事を断定的に割り切つてしまわぬ傾向を持つようになったけれど、この習慣のおかげで、いろいろと珍しい性格にお目にかかりもし、同時にまた、厄介至極なくだらぬ連中のお相手をさせられる破目にもたちいたつた。異常な精神の持ち主というものは、ぼくのような性格が尋常な人間に現われると、すぐそれと見抜いて、これに対し強い愛着を示すものである。それで、大学のころ、得体のしれぬ無法者も、そのひそかな嘆きをぼくには打ち明けたものののだが、それを理由にぼくは、なかなかの策士だと不当な非難を浴びることにもなった。しかし、そうした人びとの信頼は、たい

てい、ぼくのほうから求めたのではないのだ——あるまじうかたない徴候によって、ぼくに對する親愛の情がちらちらほの見えているなと思つたときには、ぼくはよく、眠っているふりをしたり、考えごとをしているふうを装つたり、わざとそわそわしてみせたりするのである。いま、ほの見える、と言つたが、それはつまり、若い人の親愛の情、というか、すくなくともそれを表現する言葉は、たいていの場合、他人の言に仮託する形をとつたり、歴然たる抑圧によつてゆがめられたりするものだからだ。断定的に割り切つてしまわぬということ、無限の希望を生むことになる。かつて父がしたり顔に説教したことをぼくもまたしたり顔にくりかえすわけだけれど、人間としての札にかなつた行為というものに対する感覚は、生れたときから万人均等に付与されてはしないのだということを忘れては、知りうるはずのものまで知らずに終ることになりかねないのだからと、いまなおぼくはいささか心しているのだ。

ところで、このように自分の寛容の精神を一応誇つた後で、それにも実は限界があるといふことをぼくは認めざるをえない。人間の行為には、堅い岩に根ざした行為もあれば、ぐしやぐしやの湿地から生れた行為もあるわけだけれども、ある点を越えればもう、その行為が何から出ているのかなどと、ぼくは考えておれなくなつてしまうのだ。昨秋、東部（訳注：ア
衆国の東部。アレガニ―山脈以東の、文化的伝統の最も古い地方）からもどつてきたときなど、ぼくは、世間一般が、いわば軍服を着て、永久に、精神的「不動の姿勢」をとつていてほしいものだと思つていた。人間の心中をかいま見る特権を与えられて、その中へ大騒ぎしながらはいりこむなど、もうたくさんだ

という気がしていた。ただひとり、ギャツビー、この本にその名を冠したこの男だけは例外で、彼にはほくもこうした反撥を感じなかった——ギャツビー、ほくが心からの軽蔑を抱いているすべてのものを一身に体現しているような男。もしも間断なく演技続けられた一連の演技の総体を個性といつてよいならば、ギャツビーという人間には、何か絢爛とした個性があった。人生の希望に対する高感度の感受性というか、まるで、一万マイルも離れた所の地震さえ記録する複雑な機械と関連でもありそうな感じである。しかし、この敏感性は、「創造的気質」とえらそうな名称で呼ばれるあのよわよわしい感じやすさとは無縁のものだった——それは希望を見いだす非凡な才能であり、ほくが他の人の中にはこれまで見たことがなく、これからも二度と見いだせないような浪漫的心情だった。そうだ——最後になってみれば、ギャツビーにはなんの問題もなかったのだ。むしろ、ギャツビーを食いものにしてきたもの、航跡に浮ぶ汚ない塵芥のようにギャツビーの夢の後に随っていたものに眼を奪われて、ほくは、人間の悲しみや喜びが、あるいは実らずに潰え、あるいははかなく息絶える姿に対する関心を阻まれていたのだ。

ほくの家は、過去三代にわたつてこの中西部（訳注 アレガニー山脈とロッキーマウンテンのあいだにはさまな地域）の都会に裕福な生活が続けてきた名家である。キャラウェイ家は一つの部族みたいなもので、われわれのあいだには、われわれはみなバクルー侯（訳注 英国の貴族の名門）の子孫なのだという伝説があるが、事実上の先祖はほくの祖父の兄で、これが五一年にアメリカに渡り、南

北戦争には替え玉をだしておいて金物類の卸商をはじめ、それをぼくの父が今日受けついでいるわけだ。

ぼくはこの大伯父を見たことはないのだが、ひとはぼくのことを大伯父に似ていると言う——そう言つて、父の事務室にかかつている感情をそぎ落した筆触の絵を引き合いに出すのである。ぼくは一九一五年に、父よりちやうど四半世紀おくれて、ニューヘイヴン（エール大の所）を卒業したが、まもなく、世界大戦という、あのチュートン民族の時代おくれの民族（在地）に参加した。この逆襲がぼくには実に愉快だったから、ぼくは帰ってきてもおちつかなかった。中西部もいまは、潑刺（はうらう）たる世界の中心ではなく、蕭条（しょうじょう）たる宇宙の果てという気がした。そこでぼくは、東部へ行つて証券会社の仕事を見習おうと決心した。ぼくの知つてゐる者はだれもかれも証券会社に勤めていたので、独身者をもう一人ぐらいこの世界で養つてくれるだろうと思つたのだ。伯母たちや伯父たちもこぞつて、まるでぼくをかよわせる（ブツスクール）高等学校でも選ぶみたいない態度でいろいろと話し合つていたが、最後に「うん、まあ——よからう」と、実に厳肅（かみもち）な面持でしぶしぶ承諾した。父は一年間ぼくに金を送ることを認め、かくてぼくは、何やかやで遅れたあげく、二三年の春、東部へやつてきたのである——永久に、と、自分では思つてゐた。

ニューヨーク市内に部屋を見つけたほうが便利だったけれど、しかし暑い季節ではあり、広い芝生がひらけ眼に柔らかな樹木の茂る地方をあとししてきたばかりのぼくだったから、会社のある若い男が、通勤圏のベッドタウンに共同で家を一軒借りないかと言いだしたとき

には、それは実に名案だと思った。彼はその家を見つけてきた。雨風にさらされた安手の平屋で、月八十ドル。ところが、いざというときになって、彼はワシントンに転勤を命ぜられ、けつきよくぼく一人がそこへ行くことになった。持ち物としては、犬が一匹——逃げだすまでの数日間はすくなくともぼくの持ち物だった——それから古いダッジが一台、フィンランドの女が一人。彼女は、ぼくのベッドを整え、朝食を調理し、電気焔炉（ヒート）を操りながらフィンランドの叡智（英知）をひとりつぶやいていた。

一日二日は孤独だった。が、ある朝のこと、ぼくよりもっと最近この地にきたある男が、路上でぼくをつかまえると「ウエスト・エッグの村にはどう行くんでしょうか」と、途方に暮れた様子でたずねたのである。

ぼくは教えてやった。そしてそのまま先へ歩いて行つたのだが、もうぼくは孤独ではなかった。ぼくは案内者だった。開拓者であり、土地の草分けである。この男によってぼくは、はしなくも、この界限（カウ）の市民権を付与されたようなものであった。

陽光は輝き、樹々の若葉は物の生長するさまを高速度撮影でとらえたような感じで、勢いよく萌えて（も）ている。ぼくは、この夏とともに生命がまた蘇（よみがえ）るのだという、あの何度か味わった確信をまた抱いた。

一つには、読むべきものがたくさんあり、それにあふれるばかりの健康は、無理にも引きとめなければ、若々しくも香（か）しい外気の中にとびだして行こうとする。ぼくは、銀行業務やクレジットや投資信託に関する本をいっぱい買いこんだが、それらは、造幣局から出てきた

ばかりの貨幣のように、赤や金色に輝いては多くの書棚（しよたな）にならび、マイダス（訳注：ギリシア神話のふれるものがすべ）やモルガン（訳注：アメリカの富豪）やミシーナス（訳注：ローマの詩人、政治家で、ホ）などだけが知ってゐる山吹色の秘密をときあかしてくれそうに見えた。そのうえは、他の本もたくさん読もうという高邁（こうまい）な意図も持っていた。大学時代、だいたいどちらかといえば文学青年のほうで、ある年など、『イエール・ニューズ』にまじめくさつたもつとも至極な論説を連載したこともあるのだが、それらをいま、ふたたび自分の生活の中にそっくり取りもどして、専門家の中でももつとも数少ない「円満なる人間」という専門家にもう一度なろうとしていたのだ。これは徒（いた）に警句（きんぎ）を弄（もよほ）しているのではない——結局のところ人生は、一つの窓（まど）から眺（なが）めたほうがはるかによく見えるのである。

ぼくが北米でももつとも風変りな町の一つに家を借りることになったのは、偶然というものであった。それは、ニューヨークの真東にのびる細長い蕪（がら）雑（ざつ）な島にあり、自然の奇観（きくわん）はいろいろあったけれど、中でも異様な形をした二つの土地が異彩（いさい）を放っていた。ニューヨークの市（まち）から二十マイル離れて、輪郭（りんかく）は瓜（うり）二つの巨大な卵（たまご）が一對、形ばかりの入江（いりえ）を中にしただけで、西半球の中でももつとも開化した水域たるロング・アイランド海峡の中へ、納屋（ぐら）の前庭（ぜんてい）に転がった卵（たまご）よろしくつきだしているのだ。形は完全な卵形ではない——「コロンブスの卵（たまご）」のように、どちらも陸地（かみめ）につながるほうの端（は）が平らにつぶれている——しかし、その外形上の類似は、空飛ぶ鷗（かもめ）にとつて、絶えざる驚異（きょうい）的であるにちがいない。翼（よく）なきものにとつては、その形や大きさ以外のあらゆる点で、この二つが示す相違（さいち）点こそ、さらに興味ある

現象なのだけれど。

ぼくは西の卵に住んでいた。この——そうだ、二つの卵の中で、地味なほうである。もつとも、この両者のあいだの、異様で、すくなからず無気味な感じさえする対照を表現するのに、^{ウェスト・エッグ}「地味なほう」とだけでは、いかにも皮相で陳腐な言い方だけれど。多くの家はウェスト・エッグの突端にあった。あと五十ヤードでもう「海峡」という位置で、一シーズンの家賃が一万二千ドルから一万五千ドルもする二つの巨大な邸に両側からはさまれて押しつぶされそうな格好だった。多くの家の右手にあるのは、どこから見てもこれは豪壮な代物である——ノルマンディのどこかの市庁にそっくりで、片側には、薄いひげのような蔦の若葉のかげに真新しい塔が屹立し、大理石のプールがあり、四十エーカー以上もある芝生や庭がひらけている。これがギャツビーの邸宅だった。いや、ぼくはまだギャツビー氏を知らなかったのだから、むしろギャツビーという紳士の居住する邸宅だというほうがほんとうであろう。多くの家こそ目ざわりだった。しかし、まあ、小さな目ざわりだったので、気にもかかれなかったのだ。そこでぼくは、海を眺め、隣の芝生の一部を眺め、金満家に近づいたような慰めをも味わうことができたのである——それら一切の代金が月額八十ドル。

形ばかりの入江のむこうには、水際に沿って華美な東の^{イースト・エッグ}卵の殿堂が白く輝いて見えたが、この夏の物語は、ぼくが、トム・ビュキャナン夫妻と食事をともにしに、そこへ車を駆って行った夕方をもってほんとうははじまるのだ。デイズイは多くのまたいとこの子で、トムは大学時代の学友である。ぼくは、戦争の直後、シカゴで彼らのもとに二日を過したことがあ

った。

デイズイの夫は、各種の運動競技に長じた男で、イエール大学ではフットボールのフォアワードのエンドをつとめ、ニューヘイヴンはじまって以来の最も強いエンドだった。ある意味では国民的英雄で、二十一歳にして類いまれなる傑出ぶりを示し、そのため、以後は万事が下り坂をたどっているように感じられるといったふうの男だった。彼の家は莫大な金持で——大学時代ですら、彼の無造作な金の使いぶりは非難の的になったくらいである。が、いまは、シカゴを離れて東部へきたわけだが、そのまた移り方が、あつと息を呑むほどの贅沢ぶり。たとえば、レイク・フォレスト（訳注 イリノイ州、シカゴの北ミシガン湖畔にある町）から、ポロのための馬の一隊を連れてくるといったあんばいなのだ。多くの年輩の男で、そんなことができるほどの金があるとは、理解に苦しむくらいである。

彼らがなぜ東部へきたのか、それは知らぬ。特別の理由もなしにフランスで一年を過したあげく、金持が集まってポロをやるような所を、あちこちと、おちつかなげに転々していた彼らなのだ。今度は永住するのだ、と、電話でデイズイは言っていたけれども、ほくには信じられぬ——デイズイの胸の中まで見抜くことはできないけれど、しかしトムは、敗色おおいがたいフットボールの試合などにただよう一種劇的な興奮を、むしろ憧れるかのごとくに求めて永久にさまよい続ける男のような気がするのだ。

そんなわけで、ある風の吹く暖かい夕方、ほくは、昔なじみではあるがその人間を知っているとはおよそ言いえぬ二人の友だちを訪ねて、イースト・エッグに車を走らせた。二人の

家は、入江に臨む予想以上に凝った建物で、明るい赤白二色で塗られ、ジョージ王朝ふうを模した植民時代式の館だつた。浜辺からはじまる芝生は、館の正面のドアまで四分の一マイルを埋めて、途中、日時計をとび越え、煉瓦の径をまたぎ、燃える庭をおどり越えて勢よくひろがり、最後に家につかつては、勢いあまつたともいうか、あざやかな蔦かずらに形を変えて、家の側面をはいあがつている。建物の正面にはフランス窓が並び、それがいまは、金色の夕映えに輝きながら風そよぐ暖かな黄昏の庭にひろびろと開かれていた。そして、その正面の玄関先に、乗馬服をまとつたトム・ビュキャナンが両脚を開いて立っていたのだ。彼はニューヘイヴン時代とは変つていた。いまでは、淡黄色の頭髮の逞しい三十男で、なかなかしたたか者らしく、態度も横柄だつた。さらさらと光る尊大な二つの眼に他の部分は消されてしまつて、いつも好戦的に身構えている男といった感じが身辺にただよっている。女性的なしゃれた乗馬服も、この肉体の巨大な力をつつみ隠すことはできぬ——ピカピカに磨かれた乗馬靴もはちきれんばかりで、一番上の編み紐は容易にしまらぬくらい。薄い上衣をまとつた肩を動かすと、もりあがつた筋肉の動きがわかる。それは巨大な力を發揮する肉体——苛烈な肉体であつた。

彼の声、すこししゃがれたそのテノールも、彼から受ける気むずかし屋の印象を強めている。そこには、彼が好意を持つている連中に対してすら、親が子に対するときの上手からもを言うような感じがあつて、あいつなんか大嫌いだと憎しみをこめて言う者はニューヘイヴンの頃から何人もあつた。

「おれのほうがおまえより強くて男らしいからといって、おれの意見が決定的だなんて考えるなよ」そんなふうに言っているような感じを彼からは受けるのである。彼とほくとは四年生だけの同じクラブにはいつていたが、お互いにまだ親しくもないうちから彼はほくを認め、彼一流の粗野なつかかるようなやり口で、ほくの好意を露骨に要求しているような印象を、しじゅうほくは受けていたものだ。

うららかな玄関先で、しばらくほくらは話し合った。

「おれのこの屋敷、悪くないだろう」彼は、輝く眼差しを気ぜわしくあちらこちらに投げながら、そう言った。

彼はほくの片腕をつかんで振りむかせると、その幅広い平らかな手をさつと振って表正面の並木道を指し、続いてイタリアふうの沈床園や、強い香を放っている深紅のバラの咲いた半エーカーほどの花園、さては沖にむかつて波を押しわけてゆく獅子鼻のモーターボートなどを指し示した。

「前は石油業者のドメインのものであったのだ」彼はそう言うと、だしぬけに、しかし慇懃にほくの身体をまわしながら「中へはいろいろ」

天井の高い玄関の間を抜けると明るいバラ色の部屋に出た。両側のフランス窓が壊れやすい壁といった格好である。窓はいつぱいに開かれていて、戸外のあざやかな芝生を背景に白く輝いている。芝生は家の中にまではいりこんでくる感じだった。微風が部屋の中を吹きぬけ、両側のカーテンを、あるいは内にあるいは外に、さながら水色の旗のようにはためかせ、

糖衣をかけたウェディング・ケーキを思わす天井のほうに吹きあげては、深紅色の絨毯に連を立て、海面をわたる風のように、その上に影を落して吹き過ぎてゆく。

部屋の中ですこしも動かぬものはただ一つ、巨大な寝椅子があるばかり。その上に若い女が二人、繫留気球にでも乗ったみたい浮んでいた。二人とも白の衣裳をつけていたが、その衣裳もまた、しばらく家のまわりをくるくると吹きまわされたあげく、たつたいまこへ吹きこまれたばかりといったふうに、はたはたと小刻みにふるえている。ほくはしばらくその場に足をとめて、カーテンのはためく音や、壁の絵の風に鳴る音に耳を奪われていたにちがいない。やがて、トム・ビュキャナンが裏側の窓を閉めた音が響くと、風はさえぎられて部屋の中は静まりかえり、カーテンも絨毯も、それから二人の若い女も、ふうわりと床の上に舞いおりてきた。

二人のうち、若いほうは、ほくの見知らぬ女だった。寝椅子の片側にながながと身を横たえ、寝そべったまますこしも動かない。心持ち顔をもちあげて、いまにも転げ落ちそうなものを、顔の先に支えているとでもいった感じ。眼の片隅にほくの姿をとらえたかもしれないが、それらしい気配すら見せぬ——じつさい、ほくのほうが狼狽して、闖入の弁解をおずおずと口にしようになつたくらいだった。

いま一人、デイズのほうは、起きあがろうとした——間が悪そうにちよつと身を起しかけた——が、とつてつけたみたいにか愛らしい笑い声をたてたので、ほくも笑いだして部屋の中にはいって行った。